

**能登の里山里海
石川県能登地域**

世界農業遺産保全計画（第3期）



計画期間：令和3年4月～令和8年3月

能登地域GIAHS推進協議会

令和3年4月

農林水産業システムの概要

能登は、丘陵地が海岸まで迫っている地域が多く、河川も少ない。加えて、平野部が少なく、農地が狭小である。このような地域の状況に応じて効率よく農業を行うため、傾斜地を利用した棚田や雨水や雪解け水を貯留するかんがい用のため池を活用してきた。また、能登は長い海岸線を持った半島であり、沿岸の地形や環境が変化に富み、沖合には暖流である対馬海流と冷たい日本海固有水（深層水）が存在している。このため様々な生物資源の宝庫となり多様で豊かな漁業が営まれている。

この日本海に突き出した丘陵上の半島という地形的条件から、山では山菜やきのこを採り、田んぼで米を作り、海では様々な漁法で魚を獲るなど、様々な生業（なりわい）を通じて多様な生態系の恵みを享受する、里山と里海を舞台とした人々の暮らしが営まれている。また、里山と里海は密接に関係しており、双方の舞台での生業が、お互いの環境の維持につながっている。

里山里海双方の恵みをうまく活用し、小規模な生業を組み合わせることで、能登の地域全体で生計を維持しつつ里山里海的环境も維持してきた。これらの農林水産業を核とした独自システムが構築され、暮らしの中で相互に密接な関係を保ちながら、地域全体を大きなシステムとして支えている。限られた資源を活かした能登の暮らしそのものが、生物多様性を育み、資源の持続的な利用を可能にしている。地域と農林水産業との密接な結びつきや、半島ゆえの地形的制約と相まって、固有の伝統的風習など文化的諸要素も併せて形成・維持されている。

里山、里海、米づくり、文化・信仰、これら4つをめぐる農林水産業システムを貫いているのが「能登の里山里海」の暮らしである。以降にそれぞれのシステムについて示す。

図表 能登地域の農林水産業システム イメージ図



(1) 里山をめぐる農林水産業システム

○能登の里山

能登には標高の高い山がなく、ほとんどが丘陵地であるため、海岸部の暖地性の植物を中心に、古くから林業など人の活動による自然の改変が行われてきた。また、傾斜地を利用した棚田などにおいてかんがい用のため池を利用しながら稲作が営まれてきた。

(なお、棚田とため池を利用した米づくりをめぐる農林水産業のシステムについては別途記載する。)

○里山の恵みを活かした暮らし

アテ、ケヤキ、ホオなどの天然木を木地に使い、最高級の実用漆器として親しまれている輪島塗は、珪藻土から作る「地の粉」と良質の漆を用いて、丹念な手作業を重ねて作られる。

ミズナラ、コナラ、クヌギ、アベマキなどを使用した炭づくりも行われており、高付加価値のお茶炭の産地化が進められている。また、お茶炭に向くクヌギが能登には少ないことから、耕作放棄地への植林も始まっている。

アテは、強く美しい建築材としても高い評価を得ている。黒光りする能登瓦は、能登の土と薪を使用して生産されており、下見板張りの黒瓦の家々が連なる能登特有の景観を生み出している。

日本海に面した外浦地域では、集落の里山から竹などの材料を調達し、海辺の集落を取り囲むように「間垣」と呼ばれる垣根を張り巡らせており、日本海からの冬の強い季節風から家屋を守る知恵が詰まった景観が生まれている。

また、能登の風土で育まれた野菜として、能登野菜振興協議会により「中島菜」「沢野ごぼう」「金糸瓜」などが「能登野菜」として認定され、製品のブランド化が進められており、厳しい品質管理のもと付加価値を高めることで、能登の農業の収益性や将来性を高めることが期待されている。そして米や野菜の他にも、里山の森林生態系の維持・保全の恩恵として、古くから季節の山菜、自然薯及びきのこ類が採取されている。近年では、急激に増加してきた害獣の対策として野生イノシシなどを活用した「ジビエ料理」の普及・販売促進の取組が始まっている。

○里山における能登の暮らしのシステム例

木の生育に合わせた定期的な伐採と適切な管理を行うことで、多様な環境や多様な動植物の生態系が維持・保全され、山菜やきのこ類などの恵みを享受している。成長した木材は、建材や輪島塗の木地、炭などに用いられている。

また、森林の管理により、落葉樹の落ち葉は腐葉土となり、その養分が雨により河川を通じて海に注ぎ込むことで、植物プランクトンを育み、里山だけではなく豊かな里海をつくりだしている。

(2) 里海をめぐる農林水産業システム

○能登の里海

日本海に突き出た能登半島は長い海岸線をもち、沿岸の地形や環境も変化に富んでおり、三方を囲む海岸線は「外浦」と呼ばれる岩礁海岸、リアス式海岸を含む富山湾に面した「内浦」、閉鎖性海域である「七尾湾」と、それぞれ異なる地形を持つ海岸に区分できる。また、能登半島の沖合には暖流である対馬海流と冷たい日本海固有水(深層水)が存在する。

○里海の恵みを活かした暮らし

能登では、こうした変化に富む沿岸海域の地形や環境によって、多様な魚介類が生息しており、それに応じて様々な漁業が営まれている。約 600 種類もの魚が生息しており、うち約 250 種類が食用などで利用されている。また、石川県には 200 種類以上の海藻が分布し、古墳時代から海藻を利用しているとされる能登では、現在でも約 30 種類の海藻が食されている。

外浦では珠洲市を中心に揚げ浜式製塩が行われている。かつては農耕地が乏しい農民の生業として行われており、明治以降、製塩の近代化などで一時衰退したものの、地域の特産品づくりとして復活する動きが盛んになった。海と山が近接しているため、塩田の持ち主の多くは田畑や山林を所有し、窯炊きの燃料となる大量の薪を持続的に入手するため山林を管理していた。一時、安く手に入る建築廃材を燃料として使用していたが、近年は、間伐材などの資源を利用し里山の保全を図る取組がなされている。また、まき網・定置網・底曳き網・刺網など多種多様な漁船漁業が発達し、海女漁などの採介藻漁業も盛んに行われている。特に、輪島の海女漁は 400 年以上継承される女性の素潜り漁であり、自主的にアワビやサザエの資源管理を行うなど里海との共存が図られており、国の重要無形民俗文化財としても大変貴重である。

内浦では、沿岸近くまでブリなどが回遊するため、伝統的に定置網漁が行われている。定置網漁は、編目のサイズが外側の網ほど大きくなっており、編目より小さな魚は逃げられるようになっている。定置網漁は「待ちの漁法」であるため、魚を獲り尽くす危険性が低く、持続可能な漁法といわれている。

七尾湾では「能登とり貝」、「能登かき」の養殖やナマコ漁が盛んである。2006 年に

「能登かき養殖漁業振興会」が設立され、「能登かき」のブランド化や安全・安心なカキ生産への取組が行われている。ナマコは、海底の砂泥をのみ込み、海藻片や微小生物などの有機物を消化して、砂を排泄するため、海の底質を浄化する働きもある。水揚げされたナマコは、生食のほか「くちこ」や「このわた」といった高級珍味としても珍重されている。

○里海における能登の暮らしのシステム例

恵まれた里海的环境から、能登では多様な魚介類や海藻類を採取し食してきた。この環境を維持する様々な取組が行われている。カキ養殖や海藻の成長には、陸域からの栄養分の流入が大きく影響しているため、海の資源管理のための魚付林として海岸沿いの林を大切にする漁業者が多い。内浦では、魚を獲り尽くす危険性の低い定置網漁が伝統的に採用されているほか、ナマコの資源回復のための海岸への自然石投入が行われている。

輪島の海女漁では、豊かな漁場・藻場・海洋環境を守るため、漁具や操業期間及び操業時間の制限などを設けているほか、自治体と漁業者が一体となって、アワビ・サザエなどの稚貝の放流、漁礁・自然石の投入、藻場の保全活動、海洋の美化活動を行い、生業として持続可能な漁業をめざしている。

里海の資源の有効活用として、乾燥させて塩分を抜いたカキの殻が、2006年に穴水町で誕生した「能登ワイン」の原料となるブドウ畑の肥料に使用されている事例がある。

(3) 米づくりをめぐる農林水産業システム

○能登の米づくり

能登には平地が少なく河川も少ないため、傾斜地を利用した棚田とかんがい用のため池による稲作が長年にわたり営まれてきており、人々は米づくりを中心とした生活を営み、固有の文化や慣習、技術を育んできた。また、中山間地が多く、昼夜の寒暖差が大きいことが、能登のおいしい米づくりにつながっている。

一般に、戦後の農業インフラ整備の中で、ため池からより効率的なかんがい施設への転換が行われてきたが、能登には現在でも1,890か所程度のため池が残されている。限られた土地を有効に活用した棚田や谷内田とともに、能登を代表する景観となっている。

○米づくりから得られる恵みを活かした暮らし

内陸部の棚田やため池では、全国の多くの地域で絶滅したシャープゲンゴロウモドキやマルコガタノゲンゴロウをはじめとする希少生物、サンショウモ、ヒツジグサといっ

た希少植物が確認されている。棚田やため池は、渡り鳥の飛来地や猛禽類などのえさ場としても機能しており、生物多様性保全にとって重要な場所となっている。

ため池は、地域で共同管理されており、集落の共同体制の構築にも寄与している。現在も、土地改良区や用水組合などの集落単位で用水や施設の管理を行う組織が設立され、ため池を管理している。そしてこれらのコミュニティは、キリコ祭りや「アマメハギ」などの祭礼、風習をはじめとした地域の行事を継続的に維持する土台となっている。

現在では、自然栽培による米づくりや、地域環境への影響を低減させる環境保全型農業で栽培された「能登棚田米」などのブランド化が進んでいる。また、棚田保全のためのオーナー制度の取組や、地域主体の生きもの調査が行われている。

○米づくりにおける能登の暮らしのシステム例

能登では、地形や気候条件から、古くより米づくりが行われてきた。現在でも多くのため池が残っており、ため池を地域で共同管理することで、継続的な草取りなどの実施により環境の維持が図られるほか、希少生物の生息地、渡り鳥のえさ場としても機能している。このコミュニティは、地域の祭りや行事といった文化風習の土台になっている。

(4) 文化・信仰をめぐる農林水産業システム

○農林水産業と能登の行事や祭礼神事

能登では、人々が里山里海で農林水産業を営む中で、海・山・里の実りに感謝するとともに、新たな実りを期待する行事が数多く生まれた。

能登の年中行事は「あえのこと」に代表される農業（水田）に関するもの、木材・薪の収穫と作業の無事を感謝する山祭りなどの林業（山）に関するもの、起舟などの漁業（海）に関するものに大きく分けられる。また同様に、祭礼神事も、古代からの信仰の形が名残を留めつつ、生活や生業に密着して営まれている。年の初めに行われる「予祝の祭り」、平国祭りに始まる「春祭り」、夏越しの願いや上半期の厄除けの意味がある「夏祭り」、収穫の感謝と来年の無事を願う「秋祭り」がある。さらに、三方を海に囲まれた能登に特有の祭礼として、キリコ祭り、海上渡御の祭り、恵比須講の祭りも見られる。多様で多彩な行事や祭礼神事が、季節のサイクル、農林漁業の節目にあわせて行われ、数多くが現代に伝承され、生活に密着して営まれている。このように守り継がれる伝統行事・文化のなかでも、「あえのこと」と「アマメハギ」がユネスコ無形文化遺産に、青柏祭が国の重要無形民俗文化財とユネスコ無形文化遺産に、キリコ祭りが日本遺産に登録・認定され、国内外から残すべき財産として認められている。

○文化・信仰から得られる恵みを活かした暮らし

能登の祭りでは、親せきや知人を招待し、祭りのために特別に用意された郷土料理でもてなす「ヨバレ」という風習があり、今も続いている。祭りの料理は、地域で獲れる魚を用いた「なれ鮓」のような発酵食や、自家用として栽培されてきた在来の伝統野菜などの里山と里海の豊かな恵みに支えられ、地域ごとに特色が色濃く反映されている。伝統野菜の種を絶やさずに栽培を続けていくことは、能登独特の豊かな食文化を継承していくためにも欠かすことができないものである。

一方、地域で獲れる魚や野菜の収穫時期は偏っており、それらの収穫を無駄にしないために、おすそわけの文化が発達した。魚については、能登の夏は高温多湿で、加工の際、水分をとばす前に腐敗することもあるため、微生物の力で食品を発酵させる技術が発達し、いしる（いしり）や「なれ鮓」などの豊富な発酵食品が生まれ活用されている。

国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（以下、OUIK）では、食文化を通じて、自然と農業のつながりや「能登の里山里海」の価値を学べる絵本と動画「ごっつおをつくろう」を作成し、小学生への周知・啓発を行っている。

近年の少子高齢化によって、祭りの維持が難しくなっている地域はあるものの、祭りのために帰省してくる人だけでなく、地域外の大学生などの参加を促すことによって、祭りが新たな交流の場となっている。

○文化・信仰における能登の暮らしのシステム例

人々が里山里海で農林水産業を営むことで、農林水産業のサイクルに合わせた行事や祭礼神事が数多く生まれ、現在でも多くが執り行われている。祭りの際に知人や親せきを郷土料理でもてなす「ヨバレ」の習慣により、里山里海の恵みを活用した伝統的な食文化が受け継がれている。

目次

第1	はじめに	8
第2	課題への対応策	10
1	食料及び生計の保障	10
2	農業生物多様性	12
3	地域の伝統的な知識システム	14
4	文化、価値観及び社会組織	14
5	ランドスケープ及びシースケープの特徴	16
第3	支援方法と予算の確保	17
第4	モニタリング方法	17
第5	考察	19

第1 はじめに

本計画は、国際連合食糧農業機関（FAO）が行う世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage Systems, GIAHS）に認定された「能登の里山里海」を保全・継承していくため、能登地域が行う取組の概要を示すものである。

本地域では、三方を海に囲まれ、丘陵地が海岸まで迫っている地域が多いという地形的条件や、温暖かつ高雨量であるという気候的条件から育まれる里山里海双方の恵みをうまく活用し、小規模な生業を組み合わせることで、能登の地域全体で生計を維持しつつ里山里海的环境も維持してきた。

能登の農林水産業システムは、輪島塗、炭づくり、きのこの採取などの「里山をめぐる農林水産業システム」、多様な漁業、揚げ浜式製塩、カキ養殖や海女漁などの「里海をめぐる農林水産業システム」、傾斜地を利用した棚田及び谷内田やため池がもたらす生物多様性、ため池の共同管理によるコミュニティの形成などの「米づくりをめぐる農林水産業システム」、農林水産業と結びついた行事や祭り、発酵食文化などの「文化・信仰をめぐる農林水産業システム」に大きく分けられる。

これらのシステムから、千枚田、下見板張りの黒瓦の集落や、防風垣根「間垣」などの独特の景観が生まれている。また、これらのシステムは、里山の保全が豊かな里海を作り出したり、カキ殻をワイン用ブドウ畑の肥料にしたり、揚げ浜式製塩で間伐材を使用するなど、相互に関係しながら、地域全体として大きなシステムを形成しており、能登の暮らしそのものが、生物多様性を保全し、資源の持続可能な利用に貢献している。

「能登の里山里海」が世界農業遺産に認定されてから10年近くが経過し、この間、平成23年（2011年）に「能登の里山里海 GIAHS アクションプラン」（計画期間：2011～2015年度）、平成28年（2016年）に「第2期能登の里山里海 GIAHS アクションプラン」（計画期間：2016～2020年度）を策定し、具体的な取組を進めてきた。

第2期保全計画は、GIAHS推進体制の強化、理念・価値の共有と発信、地域内外の交流促進と人材の定着、人材の育成、農林漁業従事者の生業の活発化、伝統的な技術・文化・景観の継承活動の促進、生物多様性の保全の7つの方針に沿って、「いしかわ里山振興ファンド」での支援、地元の小学生や高校生、大学生を対象とした担い手育成事業の実施、自然栽培実践塾や自然栽培に取り組む農業者への起業プログラムの整備、環境負荷の低い能登棚田米や能登米の取組の継続、「いしかわ農村ボランティア」制度の推進などを進めてきた。

第3期保全計画の策定にあたり、能登地域で保全計画の推進に取り組む七尾市、輪島市、珠洲市、羽咋市、志賀町、宝達志水町、中能登町、穴水町、能登町を主なメンバー

にワークショップを開催し、これまでの取組や成果、課題を共有し、第3期保全計画の方向性を確認した。また、第2期保全計画に対する世界農業遺産等専門家会議からの助言等を踏まえ、これまで受け継がれてきた「能登の里山里海」の資源を活かした農林水産業を核とした独自のシステムが、高齢化や担い手の減少、自然環境の変化によって、保全・継承を図ることが難しくなっているという課題に対して、担い手の育成・支援や体制の強化、地域資源の磨き上げとビジネス化、価値の向上と普及啓発、ネットワークづくりと交流促進、次世代への保全・継承を図ることを基本方針とし取り組む。

これらの取組を通じ、「能登の里山里海」の保全を通して資源管理と活用につなげることで、豊かで持続可能な能登地域を目指す。

第2 課題への対応策

1 食料及び生計の保障

A 脅威及び課題の分析

能登全体で抱える大きな課題は、人口減少と高齢化の進行である。能登の人口は、平成22年から平成27年にかけて7%減少しており、高齢化率は34.7%から40.3%に増加している。第一次産業従事者も、平成22年から平成27年にかけて、12.5%減少している。農業従事者の高齢化率は、平成27年は70.1%である。特に、農林水産業の担い手や後継者の減少は、耕作放棄地の増加につながり、生物の生息環境にも大きな影響を与えるため、生物多様性の保全を考える上でも大きな問題である。併せて、持続可能な農林水産業のため、里山里海の適切な資源管理も必要となっている。

また、「能登の里山里海」を維持・活用してきた知恵や仕組みを活かした6次産業化商品の開発や、地域の自然や文化を活用したスローツーリズムなど、新たな価値を創造して所得向上を図ることが必要である。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 担い手の確保

A 農林水産業の担い手確保

新規の第一次産業従事者の確保と育成のため、移住者と農地や指導者とのマッチング、給付金の交付などによる支援、また能登では古くから行われているライフスタイルである半農半Xを現代のライフスタイルに合わせて解釈した第一次産業と新しいXからなる生業モデルづくりに取り組む。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
新規就農者数	58人/年 （令和元年度）	85人/年
農林水産業就業人口	8,253人 （平成27年度）	維持
農業次世代人材投資資金（旧青年就農給付金制度）活用者数	38人/年 （令和元年度）	100人/年

イ 経営的視点を取り入れた農林水産業の推進による持続性の強化

経営的視点を取り入れた農林水産業を推進するため、「いしかわ農業参入支援ファンド」などを活用し、農地の確保、あっせんから人材の確保、経営の支援までを一貫して

行う「農業参入総合支援プログラム」の実施、及び専門家の派遣、圃場整備、集落営農や法人化の推進、森林の適正管理、環境に配慮した伝統的漁法である海女漁への支援等資源管理型漁業の推進、戦略的な農林水産業の取組を実施する。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
荒廃農地面積	3,251ha （令和元年度）	3,000ha

ウ 多様な担い手のネットワークづくり

勉強会や交流会の開催、農林水産業のベンチャー支援や流通・販売セミナーを開催することで、多様な人材のネットワークを形成し、移住者を含む若い世代の農林水産業への参入の促進や起業の推進を図る。

（2）新たな価値づくりによる所得向上

ア 高付加価値化の促進

環境保全型農業の価値を、技術セミナーを開催して伝えることで、自然栽培米や能登棚田米などの取組を促進し、漁獲物では活け締め等を施し鮮度にこだわるなど、農水産物の高付加価値化を進める。また、世界農業遺産活用実行委員会で実施している『未来につなげる「能登」の一品』の認定制度により、販路開拓や商品の磨き上げを図る。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
「能登」の一品 認定数	累計 40 品 （令和元年度）	累計 60 品

イ 6次産業化による商品開発・販売の仕組みづくり

「いしかわ里山振興ファンド」の活用、マッチング支援や相談窓口の設置などのコーディネート機関による支援、道の駅などでの直販システムの活性化を行うことで、6次産業化による商品開発・販売の仕組みを強化する。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
いしかわ里山振興ファンド事業採択件数	累計 129 件 （令和元年度）	累計 220 件

ウ 新たなビジネスモデルの担い手の自立化支援

各種チャレンジへの支援を行い、新たなビジネスモデルを担う人材が自立できるよう

支援する。

エ 都市農村交流の推進

都市農村交流イベントの実施及び農家民宿や農家レストラン開業のための支援を行い、都市と農村の交流を推進する。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
農家民宿開業者数	累計 82 軒 （令和元年度）	累計 95 軒
いしかわ農村ボランティア参加者数	278 人/年 （令和元年度）	500 人/年

オ スローツーリズムの推進

里山里海を舞台としたスローツーリズム推進のため、観光ボランティアや体験型観光インストラクターなどの里山里海の知恵や価値を伝える人材の育成、里山里海に関わる多様な主体をコーディネートできる組織づくり、スローツーリズムに取り組むための勉強会を開催する。平成 30 年に県が設置した「スローツーリズムサポートデスク」などを通じて、スローツーリズムの推進に取り組む。

カ 能登の特徴的な野菜や水産物のブランド化と販路拡大

地域の農協及び森林組合と連携しながら、のとてまり（のと 1 1 5）、能登大納言小豆、山菜、紋平柿、能登牛、塩、炭などの特産品の安定生産、流通ルート確保、ブランド化や販路拡大を進め、担い手の確保につなげる。

地域の漁協と連携しながら、能登ふぐ、輪島ふぐ、能登かき、能登とり貝、能登なまこ、輪島海女採りアワビ・サザエなどを使用した商品について、資源保全を図りながらブランド化、販路拡大に取り組む。

2 農業生物多様性

A 脅威及び課題の分析

各市町は、国・県の制度を用いたり、能登地域 GIAHS 推進協議会（以下、推進協議会）の支援を受けて、様々な農業生物多様性に関する調査や生きもの調査を実施している。しかし、各調査で手法が統一されていない状況となっている。

農林業従事者の減少や高齢化により、里山の適正な管理が難しくなっており、特に中

山間地を中心として耕作放棄地が増加している。耕作放棄地の増加に伴い、農作物への鳥獣被害が大きくなっている。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 生態系に関する統一したモニタリング調査の仕組みづくりと意識醸成

関係市町は、地域活動団体、研究機関、土地改良区及び小学校などと連携しながら、生きもの調査の継続的な実施と支援、生きもの観察会の実施、ボランティア活動の推進を行い、地域住民の生物多様性保全意識を醸成する。

能登地域における生物多様性のモニタリング手法、実施体制等の検討を行い、生物多様性をテーマに関係者が意見交換・情報交換を行うことができる場である「能登 GIAHS 生物多様性ワーキンググループ」を設置し、OUIK がサポートを行う。研究機関、大学などと連携しながら、簡便なモニタリング手法の開発や、データの収集分析を進める。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
生きもの調査実施件数	100 件/年 (令和元年度)	維持

(2) 里山の適正管理と鳥獣被害への対応

A 里山の適正管理

関係市町は、中山間地域等直接支払制度を活用し、中山間地の耕作放棄地の発生防止や解消を図り、適切な農業生産活動の維持を通して里山の多面的機能を確保する。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
中山間地域等直接支払制度交付実績	4,005ha (令和元年度)	維持

I 鳥獣被害対策

鳥獣被害情報の発信や鳥獣被害対策の勉強会を開催するとともに、有害鳥獣を捕獲するだけでなく、ジビエとして有効活用することで、地域の食を通じた魅力向上・収入源の確保にもつなげる。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
鳥獣被害対策の勉強会開催回数	34 回/年 (令和元年度)	40 回/年

3 地域の伝統的な知識システム

A 脅威及び課題の分析

先人たちが培ってきた、里山里海の資源を活用して生きていくための知識や技術は、担い手の減少と高齢化に伴い継承が難しくなっている。また、これらの知識や技術は、単に記録として保管されるのではなく、現代の生活の中で活用することで、将来にわたって存続・発展させていくことが必要である。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 知識や技術継承における普及と担い手の確保

小中学校や高校及び地域活動団体と連携しながら、地域に伝わる伝統的な技術に関する学校での体験授業の実施、地元高校生を対象とした生業体験の推進、輪島塗などの伝統産業や、海女漁のユネスコ無形文化遺産登録への支援、自然環境保全団体や文化継承団体などへの支援を行う。

(2) 現代生活の中での活用と高付加価値化

民間事業者や観光協会と連携しながら、都市・地域住民が、「能登の里山里海」で培われてきた多様な地域資源を活用する知識や技術の多面的価値を学ぶことができる「学びのツーリズム」を推進する。また、オーナー制度などを用いて、間垣・茅葺・棚田などに関する知識や技術の継承が図られる仕組みづくりを進める。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
里山里海に関する研修会・講演会・スタディツアーの開催	14回/年 (令和元年度)	25回/年

4 文化、価値観及び社会組織

A 脅威及び課題の分析

ライフスタイルの都市化に伴い、「能登の里山里海」双方の恵みを活用した伝統的な生活様式への意識や価値観が薄れてきた。特に、「受け継がれてきた暮らしそのものが価値である」ということは、実際に住んでいる地域住民にはわかりづらく、改めて自分達の暮らしの価値に気づくことは難しい。

さらに、農林水産業以外に従事する住民が多くなり、それまで農林水産業を中心として成立していた集落機能が低下することで、地域コミュニティが脆弱化し、人のつながりが希薄化している。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 里山里海の恵みに対する意識の向上

A 食文化からの里山里海学習

推進協議会と OUIK では、地域の有識者とともに、能登での暮らしや季節ごとの行事、食文化を通じて自然と農業のつながりや、「能登の里山里海」の価値を学べる絵本と動画「ごっつおをつくろう」を作成した。推進協議会と OUIK は、この絵本と動画を活用して、地域の小学校で里山里海学習を推進する。また、関係市町は、GIAHS に関するふりかたと学習と学校給食における地産地消を推進し、里山里海の恵みを理解する未来の担い手を育成する。

指標	現状（基準年度）	目標（令和7年度）
GIAHS に関する教育を実施した学校数	35 校/年 (令和元年度)	40 校/年

イ 「能登の里山里海」の価値を、正しくわかりやすく伝える

自然と調和した人々の暮らしそのものが評価されている「能登の里山里海」の理念と、それを構成する多くの構成資産の価値を、正しくわかりやすく伝えることは、能登地域全体のブランディングに関わる基礎的かつ重要なテーマである。

地域や大学と連携しながら、「能登の里山里海」の価値を理解できて、気軽に参加できるワークショップの開催や、その価値をわかりやすく編集して発信すること、祭礼・行事等に地域外の大学生等の多様な活動主体に参加してもらうことに取り組む。

活用実行委員会は、引き続き「能登の里山里海」の情報発信、地元の小学生や高校生、大学生を対象とした次世代の担い手育成事業を実施する。

ウ 地域課題を解決する人材育成

金沢大学と地元自治体等が連携を図り、「能登の里山里海」を学びの場に知識習得とフィールドワークを通じ課題を解決する実践者育成を目指す「能登里山里海 SDGs マイスタープログラム」等、地域が抱える課題を主体的に解決する人材育成の取組を進める。

5 ランドスケープ及びシースケープの特徴

A 脅威及び課題の分析

耕作放棄地の増加、人口減少による空き家の増加、里山里海の景観に調和しない色彩の建築物などにより、能登らしい景観の維持が今後難しくなることが想定される。

B 脅威及び課題への対応策

(1) 能登らしい伝統的景観の維持・活用

古くから半農半漁の集落が点在し、能登らしい里山里海の景観が色濃く残る海岸沿線については、平成26年度に「いしかわ景観総合計画」における「特別エリア」及び「石川県景観計画」における「特別地域」に指定されている。県や関係市町は、本制度の運用等により、今後も伝統的景観が維持されるよう取り組む。なお、七尾市と輪島市は景観行政団体として、県や関係団体と連携しながら伝統的景観の維持に取り組む。

関係市町や県は、地域と連携を図りながら、茅葺民家やはぎ干しなどの伝統的景観の維持のため、都市部住民や地元の児童・生徒を対象とした、棚田のオーナー制度運用、はぎ干し体験、田の草刈体験などを行う。

関係市町は、重要文化的景観の景観保存・修景と景観を活かした新たなビジネスの支援を行う。

第3 支援方法と予算の確保

政策の実施については、推進協議会及び、その構成団体である市町の事業や支援制度を活用して推進する。保全計画の取組は、持続可能な開発目標（SDGs）の理念とも親和性が高く、SDGsに関する予算も活用する。また、推進協議会の予算については、構成団体である市町が負担割合を定めて確保する。

第4 モニタリング方法

世界農業遺産保全計画の推進体制として、能登地域の4市5町で構成する「能登地域 GIAHS 推進協議会」と、県・関係市町・農業協同組合・漁業協同組合・森林組合・商工関連団体・観光協会等関係団体で構成する「世界農業遺産活用実行委員会」の二つの組織がある。

「能登地域 GIAHS 推進協議会」とその構成団体である市町が、「世界農業遺産活用実行委員会」、地域の関係団体、国、県、OUIK、金沢大学等と連携し、保全計画の実施・進捗・管理を行う。指標に対する達成度を確認し、必要に応じて取組の見直しを図る。農業生物多様性の調査・評価については「能登 GIAHS 生物多様性ワーキンググループ」において実施する。

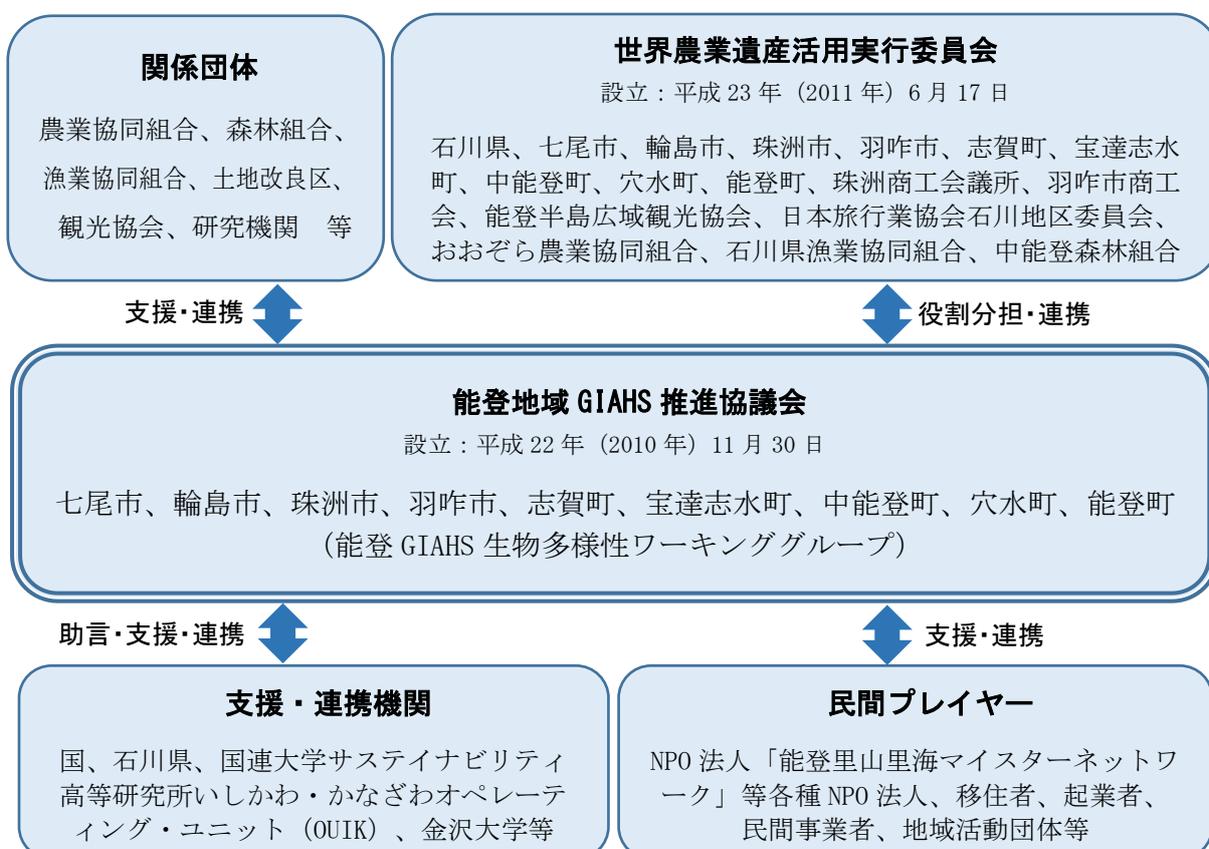


図 「能登の里山里海」世界農業遺産保全計画の推進体制

(1) 能登地域 GIAHS 推進協議会の役割

「能登地域 GIAHS 推進協議会」は、関係団体と連携を図りながら、保全計画の実施・進捗・管理を行う。指標に対する達成度を確認し、必要に応じて取組の見直しを図る。

(2) 世界農業遺産活用実行委員会の役割

「世界農業遺産活用実行委員会」は、「能登地域 GIAHS 推進協議会」と連携を図り、「能登の里山里海」の首都圏等への魅力発信、国内認定地域との連携等により世界農業遺産の価値のさらなる向上を図る各種取組を実施する。

(3) 専門部会の役割（能登 GIAHS 生物多様性ワーキンググループ）

簡便なモニタリング手法の開発や、データの収集分析を進め、世界農業遺産「能登の里山里海」の生物多様性の把握を行い、情報の共有を図る。

(4) 市町の役割

地域内外への情報発信、資源管理、後継者育成、環境保全活動、農林水産業の振興等を進め、里山保全施策、地域振興施策の実施及び関係団体を支援する。

(5) 石川県の役割

県が策定するビジョンや事業と保全計画の整合、連携を図りつつ、第一次産業の振興、生物多様性の保全、里山里海資源を活用したビジネス創出、多様な主体の参画による里山里海保全活動の推進に取り組む。

(6) 大学、研究機関の役割

金沢大学が地元自治体と連携して実施する「能登里山里海 SDGs マイスタープログラム」など、人材育成へつなげる取組を推進する。

また国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（OUIK）においては、「能登の里山里海」研究を通じた政策提言に加えて、国連機関として世界農業遺産をめぐる国際的な動きや研究に関する知見を提供する。

第5 考察

本保全計画では、これまで受け継がれてきた「能登の里山里海」の資源を活かした農林水産業を核とした独自のシステムが、高齢化や担い手の減少、自然環境の変化によって、保全・継承することが難しくなってきたという脅威と課題を明らかにした。

能登における独自のシステムには里山里海での人の営みや生物の多様性が含まれ、その対象範囲は多岐にわたり相互に密接に関わっており、これらの脅威と課題に対しても、取り組む必要がある。

一方、「能登の里山里海」の価値を再評価し、現代の生活に合わせて新たな形で活用する動きが生まれてきている。例えば、一度は衰退したものの、地域の特産品づくりとして復活した揚げ浜式製塩、能登の里山里海の価値を新たな視点で発見し実際の活動へとつなげる能登里山里海 SDGs マイスタープログラム、「木の駅」プロジェクト（不揃いの林地残材や放置された間伐材を地元商店で使用可能な地域通貨と交換し、里山保全や地域活性化につなげる取組）、食文化という切り口で能登の里山里海の価値を伝える絵本や動画「ごっつおをつくろう」の小学校での活用などが挙げられる。

また里山里海の資源を活用した生業の創出等を推進する「いしかわ里山振興ファンド」や「いしかわ農業参入支援ファンド」等により、「能登の里山里海」で生まれる新たな活動に対する支援の仕組みも揃ってきており、耕作放棄地で県内外の学生が完全無農薬の米から酒をつくる「N-project」、畔に小豆を蒔き和菓子をつくる「のがし研究所」など、小さいながらも「能登の里山里海」の価値の創造につながる影響力のある取組が生まれている。

第3期世界農業遺産保全計画では、担い手の育成・支援や体制の強化、地域資源の磨き上げとビジネス化、価値の向上と普及啓発、ネットワークづくりと交流促進、次世代への保全・継承を図ることを基本方針とし、具体的な取組と数値目標を定めた。

また、推進協議会、各市町、県、大学や研究機関の役割を明確にして、保全計画の着実な実行を図ることとした。

保全計画の推進は、地域住民の自分達の暮らしの価値に対する気づきにつながり、農林水産業の担い手の確保や育成、価値を活用した高付加価値の商品開発やスローツーリズムなどの新たなビジネスが生まれることが期待される。農林水産業の担い手が確保されること、里山里海の資源を活用する知識の継承によって、里山里海の適正な管理、ひいては地域全体での持続可能性の確保につながる。

また、スローツーリズムや多様なネットワークの活発化により、地域の関係人口や交流人口が増加し、新たな人材の確保や地域活性化につながる。そして、農林水産業が維

持され、能登の暮らしの価値が理解されることで、農林水産業を中心とした行事や祭り、食文化などの次世代への継承が図られる。さらに、保全計画の推進は、SDGs の理念である「経済、社会及び環境の三側面を、不可分のものとして調和させる」統合的取組にもつながると捉える。

世界農業遺産の認定から 10 年を一つの区切りとして、これまでの取組や成果を踏まえ、豊かで持続可能な能登地域を実現するため、今後とも関係者が一丸となって取組を進めていく。

参考：資源位置図

景観の区分と資源

内陸山間地



1

輪島市三井町 茅葺屋根の家屋



2

能登町「春蘭の里」母屋と納屋



3

輪島市町野町金蔵 ため池

外浦



4

珠洲市川浦町 海岸に面した集落



5

輪島市白米町 白米の千枚田



6

輪島市上大沢町 間垣



7

志賀町赤崎 赤崎住居



8

志賀町 ころ柿干し場



9

羽咋市神子原町



内浦



穴水町岩車



穴水町志ヶ浦



穴水町鹿島 鹿島神社



14

七尾市庵町



七尾湾のカキ棚

内陸山間地の景観

内陸部は、海岸沿いに比べ降水量・積雪量が多く、気温も低い。また、河川が少なく、集落や個人により多くのため池がつけられてきた。この地域の民家は、一般的に、母屋と納屋、土蔵からなるものが多い。

外浦の景観

北部は荒々しい岩礁地帯に面したわずかな平坦地を利用した集落が見られる。南部では、千里浜海岸や羽咋市神子原の棚田など、北部とは違った景観が見られる。

内浦の景観

穏やかな海域を前景に、沿岸部に神社林と漁港を中心とした集落が点在しており、周辺には、水田や畑作地が分布し背後に山地が広がっている。

主な漁法等

舩倉島



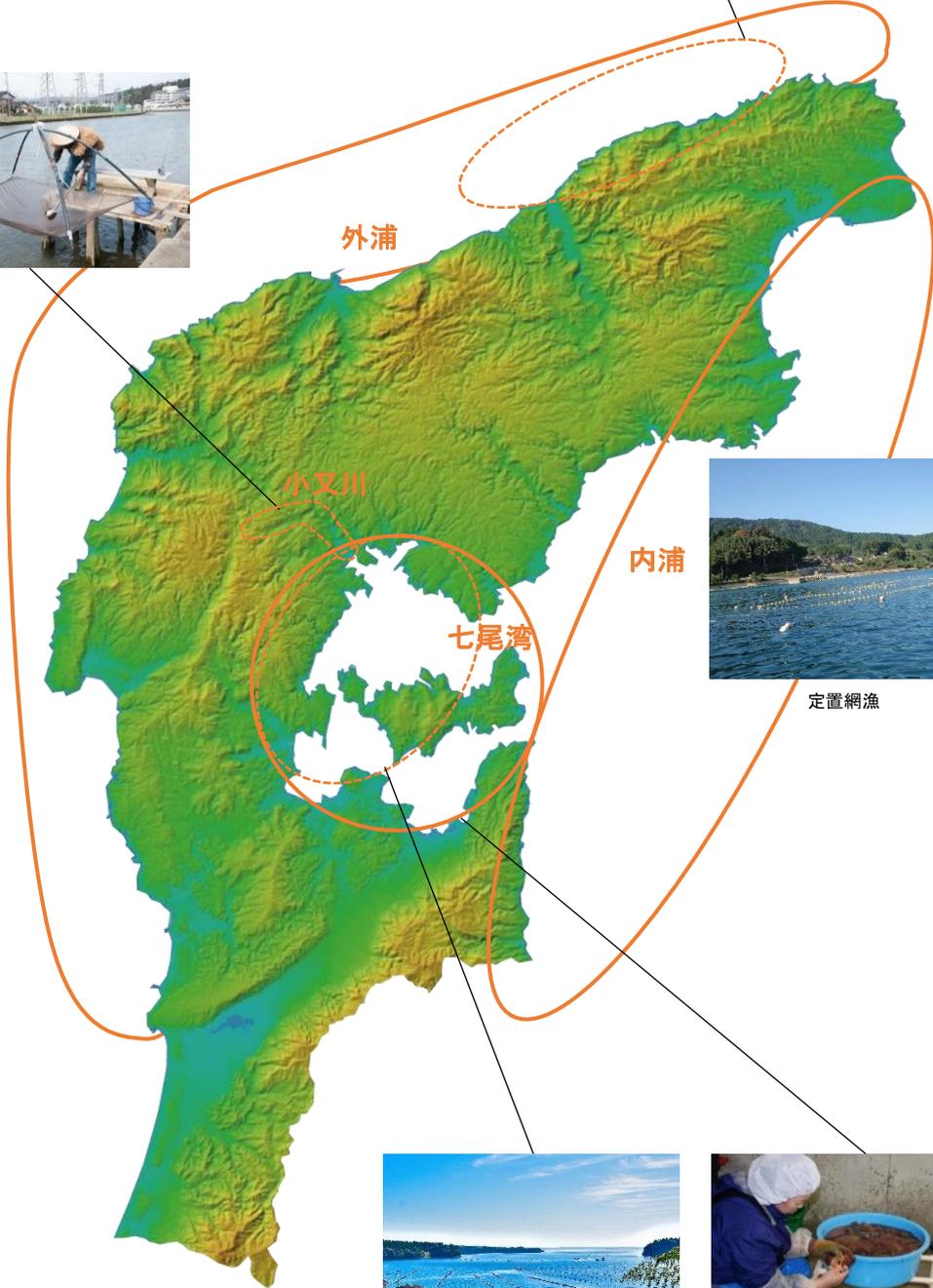
海女漁



揚げ浜式製塩



イサザ漁



定置網漁

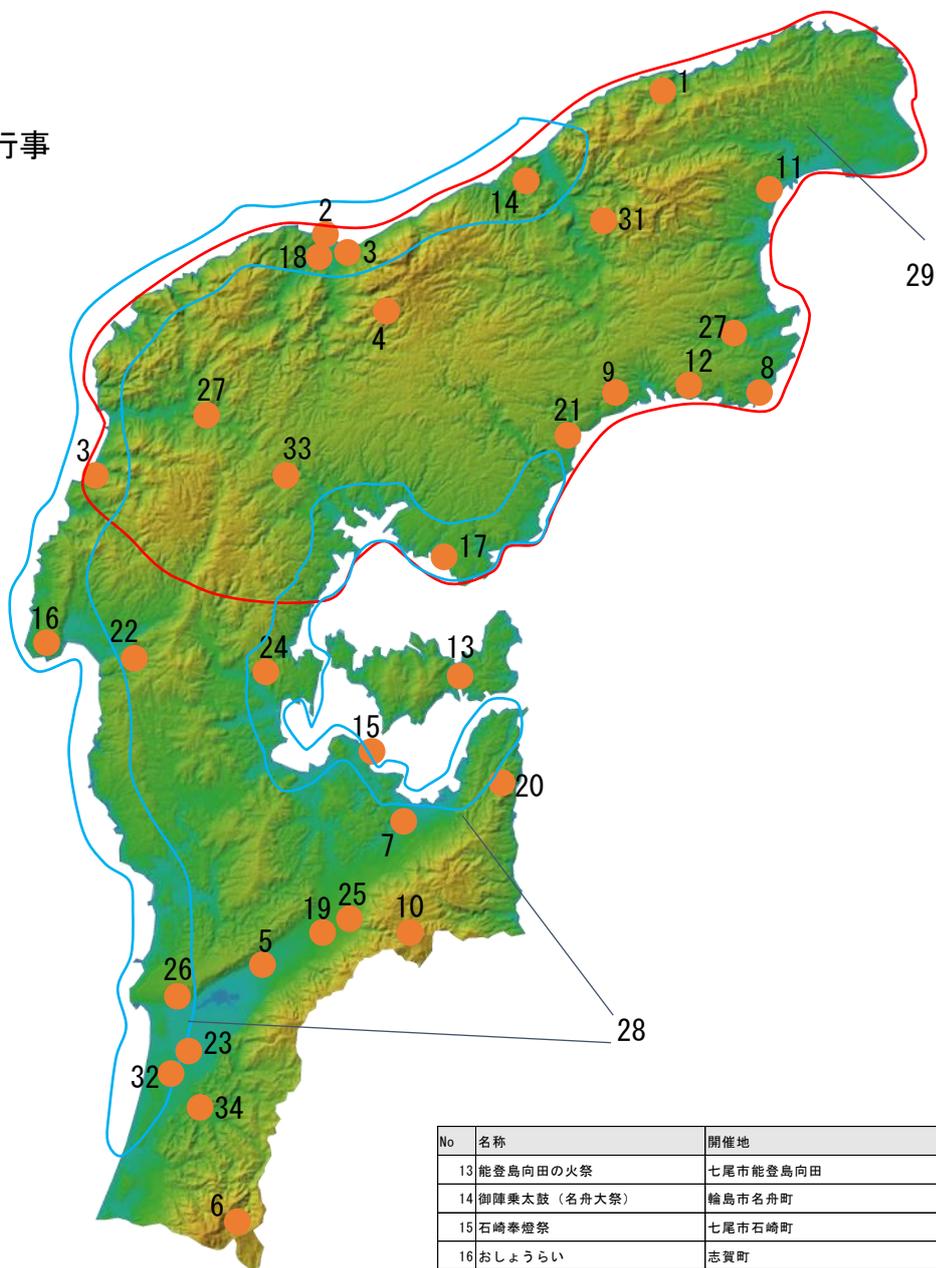


カキ養殖
22



ナマコ漁（加工場）

祭礼神事と年中行事



祭礼神事

No	名称	開催地	開催日
1	たたき堂祭り	珠洲市片岩町	1月6日
2	恵比寿講	輪島市輪島崎町	1月10日、11月20日
3	面様年頭	輪島崎町(輪島前神社) 河井町(重蔵神社)	1月14日
4	もっそう祭り	輪島市久手川	2月16日
5	三番叟	中能登町能登部下	4月
6	宝達山の開山祭	宝達志水町宝達山	4月23日
7	青柏祭	七尾市	5月3～5日
8	伴旗祭り	能登町小木	5月2、3日
9	あばれ祭り	能登町	7月第1金曜日・土曜日
10	石動山の開山祭	中能登町石動山	7月7日
11	飯田町燈籠山祭り	珠洲市	7月20、21日
12	どいやす祭り	能登町	7月第4土曜日・日曜日

No	名称	開催地	開催日
13	能登島向田の火祭	七尾市能登島向田	7月最終土曜日
14	御陣樂太鼓(名舟大祭)	輪島市名舟町	7月31日、8月1日
15	石崎奉燈祭	七尾市石崎町	8月第1土曜日
16	おしょうらい	志賀町	8/13夜
17	沖波大漁祭り	穴水町	8月14、15日
18	輪島大祭	輪島市	8月22日～25日
19	鎌打神事	中能登町藤井、金丸	8月27日
20	日室の鎌祭	七尾市江泊町	8月27日
21	にわか祭	能登町	8月第4土曜日
22	富木八朔祭礼	志賀町	8月最終日曜日、その前日
23	川渡し神事	羽咋市川原町	9月14日
24	お熊甲祭り	七尾市中島町	9月20日
25	ばっこ祭り	中能登町能登部上	11月17日～21日
26	鶴祭り	羽咋市(氣多大社)	12月16日

年中行事

No	名称	開催地	開催日
27	アマメハギ	輪島市門前町、能登町秋吉	1月6日、2月3日
28	起舟	海沿いの集落	2月11日
29	あえのこと	輪島市、珠洲市、穴水町、能登町	2月9日、12月5日
30	虫送り	能登一円	6、7月
31	金蔵万燈会	輪島市町野町金蔵	8月16日
32	唐戸山神事相撲	羽咋市南中央町	9月25日
33	盤持ち	穴水町下唐川	10月
34	蓮華山大相撲	宝達志水町子浦	10月17日

根拠データ一覧

項目名	単位	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R1 年度	R2 年度	出典等
きのこ類 生産量（乾しいたけ、生しいたけ、なめこ、えのきたけ、ひらたけ、まつたけ、まいたけ、エリンギの計）	t	410.99	363.394	353.848	324.709	323.442	247.271	240.747	265.542	286.379	267.734	—	石川県奥能登農林総合事務所調べ
乾しいたけ 生産量	t	16.160	18.865	17.812	12.924	12.902	14.811	13.774	9.529	9.199	6.852	—	石川県奥能登農林総合事務所調べ
生しいたけ 生産量	t	387.840	341.356	334.452	309.477	308.821	231.126	225.513	254.719	276.039	259.615	—	石川県奥能登農林総合事務所調べ
山菜（わらび）生産量	t	15.649	21.224	22.624	23.246	24.226	33.409	25.408	22.890	22.159	11.579	—	石川県奥能登農林総合事務所調べ
山菜（ふき）生産量	t	57.650	51.339	51.319	44.262	38.366	37.430	29.323	27.764	27.982	21.106	—	石川県奥能登農林総合事務所調べ
木炭 生産量	t	68.2	66.4	70.0	77.9	94.8	68.0	68.6	78.0	52.2	51.1	—	石川県奥能登農林総合事務所調べ
耕地面積（田）	ha	16,292	16,180	16,104	16,048	15,885	15,738	15,546	15,317	15,218	15,149	—	石川県奥能登農林総合事務所調べ
耕地面積（畑）	ha	3,956	3,914	3,890	3,882	3,851	3,796	3,770	3,736	3,718	3,711	—	石川県奥能登農林総合事務所調べ
海女漁従事者数	人	220	220	220	215	215	200	200	162	161	154	155	市町調べ
揚げ浜式塩 出荷量	t	8.8	7	7.6	7.5	6.3	8.4	6.1	3.1	5.3	7.7	—	市町調べ、H22・23年度は製造量
能登ワイン醸造用原料ブドウ 収穫量	t	67.997	68.169	63.481	111.986	104.961	152.104	129.615	84.370	68.580	97.908	116.159	市町調べ
のと115 出荷額	百万円	—	1.02	1.21	1.66	1.30	1.68	2.00	2.08	1.80	1.93	1.79	市町調べ
のと115 出荷量	箱	—	806	921	1,703	1,548	1,834	2,098	2,234	2,116	1,825	1,880	市町調べ
なまこ 捕獲量	t	—	—	—	76.3	65.5	69.8	106.1	111.5	119.1	76	29.6	石川県漁業協同組合七尾支所調べ R2年度は2/18日現在
くちこ 生産量	kg	520	520	540	530	640	550	530	660	540	670	580	市町調べ、R2年度は2月現在
このわた 生産量	kg	1,170	1,290	1,240	1,140	1,370	1,180	1,470	1,390	1,280	1,670	1,290	市町調べ、R2年度は2月現在
能登かき 収穫量	t	1,970	2,039	1,812	1,585	1,969	1,430	1,414	1,908	1,602	—	—	北陸農林水産統計年報
能登とり貝（養殖）出荷量	個	—	—	—	—	1,458	12,864	15,719	14,947	25,494	26,600	65,000	七尾市：H27年から本格出荷開始。県水産課調べ 穴水町：H26年から養殖・出荷。石川県漁業協同組合穴水支局調べ
天然とり貝 漁獲量（kg）	kg	3,454	6,720	11,162	7,405	0	110	0	0	6,981	1,621	164	石川県水産総合センター調べ
大学生の農業体験、交流事業、ゼミ合宿、祭りへの参加者数参加者数	人	—	—	103	429	213	433	565	324	660	887	76	市町調べ、R2年度は未確定の市町あり
能登牛 出荷数	頭	565	604	640	707	695	672	930	874	1,010	942	—	石川県畜産振興・防疫対策課調べ
「いしかわジビエ料理 提供店ガイド」掲載店舗数	軒	—	—	—	—	—	42	55	88	91	95	—	石川県里山振興室調べ

項目名		単位	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R1 年度	出典等
15 歳以上就業者数	農業	人	6,582					5,849					国勢調査
	林業	人	529					372					
	漁業	人	2,324					2,032					
専業別農家数	専業農家	戸	2,210					1,986					農林業センサス
	兼業農家	戸	6,920					4,892					
集落営農数	集落営農		—	91	94	99	104	108	111	114	113	104	集落営農実態調査
組織形態別経営体数 (農業)	農事組合法人	経営体	53					78					農林業センサス
	株式会社	経営体	54					74					
	合同会社	経営体	0					5					
	農協	経営体	40					31					
	その他法人	経営体	5					4					
	法人化していない	経営体	9,192					6,956					
組織形態別経営体数 (林業)	農事組合法人	経営体	3					2					農林業センサス
	株式会社	経営体	21					19					
	合同会社	経営体	0					0					
	森林組合	経営体	10					7					
	その他法人	経営体	4					2					
	法人化していない	経営体	1,510					833					
組織形態別経営体数 (漁業)	会社	経営体				116					46		漁業センサス
	漁業協同組合	経営体				0					0		
	漁業生産組合	経営体				6					1		
	共同経営	経営体				28					10		
	その他団体経営体	経営体				0					2		
	個人経営体	経営体				3,088					1042		
木材・木製品	事業所数	箇所	32		26	25	26			21	23	—	石川縣市町要覧
	従業者数	人	410		366	371	382			380	390	—	
	製造品出荷額等	万円	878,350		973,019	1,015,815	969,500			1,175,014	1,194,001	—	
漁業種類別漁獲量	漁獲量計	t	62,060	63,657	55,569	68,835	54,239	61,905	54,495	34,054	58,691	—	海面漁業生産統計調査
	底引き網	t	4,513	4,084	3,793	3,341	2,986	3,105	2,876	2,931	3,022	—	
	定置網	t	15,645	16,470	13,671	20,021	14,748	23,701	20,513	9,729	26,372	—	
	採貝・採藻	t	919	946	1,084	826	885	936	687	671	747	—	
魚種別漁獲量	まぐろ類	t	456	814	339	776	706	304	350	434	251	—	海面漁業生産統計調査
	かつお類	t	713	595	667	229	85	313	234	201	245	—	
	いわし類	t	17,258	12,127	10,627	18,790	4,647	16,409	12,985	1,577	25,885	—	
	あじ類	t	3,963	3,915	3,323	3,951	4,946	3,401	3,334	3,013	1,857	—	
	さば類	t	1,971	4,183	6,215	6,133	4,846	4,637	4,906	3,237	7,157	—	
	ぶり類	t	8,794	11,165	7,400	13,839	15,524	13,752	11,816	8,167	6,381	—	
	はたはた	t	1,512	1,103	1,026	638	499	770	512	503	474	—	
	たい類	t	968	915	614	661	666	691	631	717	549	—	
	さわら類	t	1,282	958	699	758	1,055	2,017	2,280	1,142	1,702	—	
	えび類	t	195	166	197	195	280	296	295	338	353	—	
	かに類	t	856	881	866	841	766	683	571	629	618	—	
	いか類	t	14,462	17,160	14,835	14,132	12,529	9,805	8,144	7,190	4,960	—	
海藻類	t	145	236	411	215	262	310	128	121	298	—		
養殖魚種別収獲量	貝類	t	1,970	2,039	1,812	1,585	1,969	1,430	1,417	1,909	1,607	—	海面漁業生産統計調査
地域おこし協力隊	人数	人	0	0	1	3	7	11	25	29	34	40	総務省

世界農業遺産 保全計画 取組一覧

石川県能登地域

取組	ページ	実施者	実施時期					指標	
			R3	R4	R5	R6	R7	現状	目標(令和7年度)
1 食料及び生計の保障									
(1) 担い手の確保									
ア 農林水産業の担い手確保	3	◎関係市町、◎県 農協、漁協、森林組合	○	○	○	○	○	①新規就農者数 58人/年 (R1) ②農林水産業就業人口 8,253人(H27) ③農業次世代人材投資資金 (旧青年就農給付金)制度活	①85人/年 ②維持 ③100人/年
イ 経営的視点を取り入れた農林水産業の推進 による持続性の評価	3	◎関係市町 県、農協、漁協、森林組合、土地改良 区	○	○	○	○	○	荒廃農地面積 3,251ha(R1)	3,000ha
ウ 多様な担い手のネットワークづくり	4	◎関係市町 民間事業者、農協、漁協、森林組合	○	○	○	○	○		
(2) 新たな価値づくりによる所得向上									
ア 高付加価値化の促進	4	◎関係市町、◎活用実行委員会 農協、漁協、森林組合	○	○	○	○	○	「能登」の一品認定数 累計40 品(R1)	累計60品
イ 6次産業化による商品開発・販売の仕組みづ くり	4	◎関係市町、◎県 地域、民間事業者、農協、漁協、森林 組合、商工会議所、地元金融機関	○	○	○	○	○	いしかわ里山振興ファンド採 択件数 累計129件(R1)	累計220件
ウ 新たなビジネスモデル担い手の自立化支援	5	◎推進協議会 関係市町、NPO法人「能登里山里海 マイスターネットワーク」、民間事業者	○	○	○	○	○		
エ 都市農村交流の推進	5	◎関係市町 県、地域、民間事業者	○	○	○	○	○	①農家民宿開業者数 累計82 軒(R1) ②いしかわ農村ボランティア参 加者数 278人/年(R1)	①累計95軒 ②500人/年
オ スローツーリズムの推進	5	◎関係市町、◎県 地域、民間事業者、観光協会	○	○	○	○	○		

(3) 能登の代表的な野菜や水産物のブランド化と販路拡大								
	6	◎関係市町	○	○	○	○	○	
2 農業生物多様性								
(1) 生態系に関する統一したモニタリング調査の仕組みづくりと意識醸成								
	6	◎推進協議会、◎関係市町 OUIK、地域活動団体、研究機関、大 学、土地改良区、小学校	○	○	○	○	○	生きもの調査実施件数 100 件/年(R1) 維持
(2) 里山の適正管理と鳥獣被害への対応								
ア 里山の適正管理	6	◎関係市町	○	○	○	○	○	中山間地等直接支払制度交 付実績 4,005ha(R1) 維持
イ 鳥獣被害対策	6	◎関係市町 県、地域、民間事業者	○	○	○	○	○	鳥獣被害対策の勉強会開催 回数 34回/年(R1) 40回/年
3 地域の伝統的な知識システム								
(1) 普及と担い手の確保								
	7	◎関係市町 地域、小中学校、高校、地域活動団 体	○	○	○	○	○	
(2) 現代生活の中での活用と高付加価値化								
	7	◎関係市町、◎県 地域、民間事業者、観光協会	○	○	○	○	○	里山里海に関する研修会・講 演会、スタディツアーの開催回 数 14回/年(R1) 25回/年

4 文化、価値観及び社会組織									
(1) 里山里海の恵みに対する意識の向上									
ア 食文化からの里山里海学習	8	◎推進協議会、◎関係市町 OUIK、関係市町	○	○	○	○	○	GIAHSに関する教育を実施した学校数 35校/年(R1)	40校/年
イ 「能登の里山里海」の価値を、正しくわかりやすく伝える	8	◎推進協議会、◎関係市町 地域、大学	○	○	○	○	○		
ウ 地域課題を解決する人材育成	9	◎関係市町 大学	○	○	○	○	○		
5 ランドスケープ及びシースケープの特徴									
(1) 能登らしい伝統的景観の維持・活用									
	9	◎県、◎関係市町 地域、民間事業者	○	○	○	○	○		

注1)実施者について、実施者が複数存在する場合には、責任者に◎を付けてください。

注2)「指標」は可能な限り定量的なものを記入してください。

注3)セルは必要に応じて挿入、削除してください。

注4)「ページ」には保全計画本文の該当するページを記入してください。

注5)世界農業遺産への認定申請に係る承認のみを申請する場合は、別紙2の第1の2(1)～(5)の5つの基準ごとに項目立てした上で記載してください。

なお、既に日本農業遺産に認定されている地域が世界農業遺産への認定申請に係る承認を申請する場合は、別紙2の第2の1～3の3つの基準に関する事項を、別紙2の第1の2(1)～(5)に包含する形で記載してください。

注6)実施期間は、令和3年度から令和7年度としてください。ただし、世界農業遺産に既に認定されている地域が日本農業遺産への認定申請を行う場合は、現行の世界農業遺産保全計画の計画期間としてください。